

資料

「看護の詩」（ナイチンゲール）を巡る考察 —「知の発展の最前線」と看護師のアイデンティティ

井村俊義¹⁾

¹⁾ 長野県看護大学

長野県看護大学紀要

第21巻別刷

2019年3月

「看護の詩」(ナイチンゲール)を巡る考察 —「知の発展の最前線」と看護師のアイデンティティ

井村俊義¹⁾

【要 旨】看護師は他の職種と協働して業務を行うとともに、独自の役割を有している。個々人の技術的な側面とともに、看護をどのように捉えるかという問題である。一方、看護の役割は時代の変化によって移り変わり、外国との違いもある。それらの点を考慮しながら、看護師が担う独自の役割の可能性について論じた。その際に、ナイチンゲールの「看護の詩」という言葉、ベナーの「知の発展の最前線」などの言葉をもとにした。さらに、阿保による身体論や、岡田による写真を含む芸術論を参照した。患者は、多くの点でひとりひとり異なり、さらには揺れ動くため、看護師が医療者として他者と出会う際に用意すべき心構えは、固定されたモデルに患者をあてはめようとするのではなく、いかに人間は複雑であるかを知らうとする態度である。そのような点も踏まえ、多職種との協働を進めるうえで看護師が参照すべき専門家としてのアイデンティティについて考察した。その結果のひとつとして、宗教や芸術を通してナイチンゲールが提示した看護師像を再び検討する意義が示唆された。

【キーワード】(前)近代、看護の詩、知の発展の最前線、身体論、芸術論

はじめに

看護を含めた医療全般は、合理化を目的とする「近代」化を通して徐々に分業化され、効率化した。一つ一つの役割の負担を少なくすることによって専門化し、多くのスペシャリストを生んだのである。それによって、技術的な面での専門家の技術は大いに発揮されたが、一方で、人間を総体としてみる視点の必要性があらためて見直されるようになった。視点の中には、人間の身体をどのように見るのかという形而上的な側面と、看護という職業の性質上、その成果をどのように治癒に反映させるかという現実的な問題も含まれていた。「人が治るとはどういうことか」という問いから生まれる総合的な知へとつながる研究が昨今、積極的になされている理由はそこにある。例えば、全

体を見渡すジェネラリストからの視点が相対的に低下するなかで「ホリスティック」という言葉が使われるようになったことも一つの現れである。

また、近代化および分業化による総合的な知の喪失とともに「理論と実践(座学と演習、マニュアルと応用)」のあいだの隔たりも問題視されるようになった。イギリスの看護師であり教育学者でもあるロルフの論文をまとめた『看護実践のアポリア』もその一つである。その中でロルフは「看護理論が、実践する看護師の関心にいかに言及しなくなったか」(ロルフ, 2017)という根本的な問題を提起している。かつて看護学を一つの領域として確立させるためにおもにアメリカにおいてさまざまな看護理論が考案された。アメリカの哲学者で『看護の知識』という著作もあるリ

¹⁾長野県看護大学
2018年10月4日受付
2019年3月26日受理

スジョードは「看護学者がどの哲学を取り入れるかを決めたために、看護は理論と実践のあいだの関連性に断絶を生じた：筆者訳」（Risjord, 2009）と述べ、フッサール、ハイデガー、サルトル、メルロ＝ポンティなどが看護理論にどのように導入されたかについて詳細に論じ、哲学者の果たすべき役割を提唱した。看護研究で用いられる理論と臨床における知はどのように接続するのか、これもまた看護が直面している大きな問題である。ここでも同様に、哲学や現代思想を立脚点としながら、リベラルアーツという総合的な知を念頭において論じていくこととする。

属性として硬直化しがちな「理論」と絶えず揺れ動く「臨床」の現場を結びつける方法は存在するのだろうか。「知の発展の最前線」（Benner, 1989）として人文系の学問を統合する分野としての看護学、また、理論と実践を統合する学問としての看護学という二つの側面を念頭におき、「身体論」や「芸術論」を足がかりにして、それらを「看護の詩学」という言葉に集約しながら、看護学のもつ可能性の一端を探っていきたい。それはまた、看護師のアイデンティティを問い直すことにもつながるだろう。なお、ここで使用している「アイデンティティ」とは、個々人の内面における自己同一性のことではなく、看護師の専門家としての独自性を指している。

1. 前近代とのはざまを生きたナイチンゲール

ナイチンゲールが生きた19世紀の英国は、産業革命を終え急速に近代化へと舵を切っていた。「進化」や「進歩」という概念が称揚され、あらゆる分野で大きな変革が迫られた。『看護覚え書』が出された1859年がダーウィンの『種の起源』が出版された年でもあることは象徴的である。現代においても看護教育に大きな影響力を及ぼしているこの本は、以上のような時代背景を念頭におきながら読まれる必要がある。つまり、このテキストは、前近代と近代のはざまに書かれ、さらに、戦時を通して着想され記述されたということである。もう一つ、注意すべき点は『看護覚え書』が世に出された一年後に「補章」が付け足されたことである。そこでは、本文における具体的な看護方法を省みたうえでの、ナイチンゲールの本来の

意図を総括するような看護観がまとめられている。その冒頭の「看護師とは何か（What is a nurse?）」の一行目に「看護の詩（the poetry of nursing）」という言葉はおかれている。

This book takes away all the poetry of nursing, it will be said, and makes it the most prosaic of human things. My dear sister, there is nothing in the world, except perhaps education, so much the reverse of prosaic — or which requires so much power of throwing yourself into others' feelings which you have never felt, — and if you have none of this power, you had better let nursing alone. (Nightingale, 1860/2017)

（この書は、看護のもつあらゆる詩的で優雅な面を取り払い、看護を人間の行いのなかでもっとも散文的で単調なものにしてしまったと言われるかもしれませんが。私の仲間である女性のみなさん、おそらく教育を除いて、この世で看護ほど単調で退屈とは正反対のものはありません。すなわち、看護は、これまで感じたことがない他人の感情の中に自らを投げ入れる能力がどの仕事よりも求められ、もしこのような能力をまったくもたないのならば、その人は看護に携わるべきではないのです：筆者訳）

「手順書（manual）」のように見える形式で記述された「本文」に接した読者が「看護の詩がすべて取り除かれてしまった」と感想を漏らすのではないかとナイチンゲールは危惧している。彼女自身は「看護の詩」の意味についてわかりやすい定義を行ってはいない。むしろ、定義できるようなものではないと考えているのではないだろうか。定義づけという方法は、状況を固定化し、意味を狭めるものだからだ。ナイチンゲールはただ、患者が抱えている言葉にはならないメッセージを受けとめるためのさまざまな具体例を並べる。それらの具体例では、患者は高価な家具、病気の牛、壊れやすい陶磁器などと比較され、人はかならず変化するものであり、膨大な情報が隠されていることが示唆される。ナイチンゲール看護学のキーワードの一つに「観察（observation）」があり、本書にお

いても何度も言及されるが、それはじっと見ることではないと具体例の中で説明されている。「観察」の方法は、視覚のみによって行われるのではなく、総合的な感受性を通して行われ「変化する情報」を受けとめるのである。このような態度は、私たちが目指す「看護学」の一つの目的地となっている。

ここで、看護師と患者のあいだに交わされる、数値や合理的な説明とは異なる方法論を、私はナイチンゲールに倣って「看護の詩学」（nursing poetics）と仮に呼ぶことにしたい。一般的に「詩」が、日常的に使用される言葉の「配列」や「選択」などの修辞を駆使して、散文では表現できないものを表そうとするのと同じように、看護もまた「アート」として、言葉では表現できないものを体現する場であることを意図している。そこでは、定義ではなく具体例や物語が重視される。それらが伝える内容には、近代化によって「余剰として捨てられた部分」のなかで、現代においても有効な価値とその価値を表象する手段を含んでいる。「看護の詩学」においては、「詩」が散文では語りきれない内容を表現するために修辞等を駆使してさまざまな状況や感情を表現しようとするように、理論よりもモノ、抽象よりも具体、マニュアルよりも物語、明晰さよりも手触りを重視する。体系化してものごとを理解するよりもまず、対象そのものに「巻き込まれる（involved）」（Benner, 1989）ことに重きをおき、したがって、抽象的な理論を通して対象を理解するのではなく、状況を文学的な言葉あるいは物語にすることによって、個々の患者の「単独性」を理解するのである。

古来、伝達的手段として用いられてきた「物語」は、人々を関係性や共同体へとつなぎ止める力をもっていた。物語は、何かを捨象することによって成り立つ近代のおよび合理的な明晰さではなく、言葉以前の情報を含む身体への感受性への信頼を維持するのである。したがって、多様な患者を透明な個に置き換えるようなことはしない。彼らの快や不快を最大公約数によって導き出す功利主義的発想とはもっとも遠い場所から患者に近づくことを想定する立場が「看護の詩学」である。看護師は、誰でもない一度きりの人生を生きている患者が発する「その場、その時」しか存在

し得ない「意味」を、物語などを通して受けとめるのである。そもそも『看護覚え書』の冒頭には、次のように書かれていた。

The following notes are by no means intended as a rule of thought by which nurses can teach themselves to nurse, still less as a manual to teach nurses to nurse. (これから述べる覚え書は、看護師に看護を学ばせるための考え方のルールを示そうとはしていません。ましてや、看護師に看護の仕方を教えるマニュアルでもありません：筆者訳)。

このあとに、この覚え書は考えるための「ヒント」に過ぎない、とも述べている。この書を教科書のように使用しないようナイチンゲールは戒めているのである。一般の人々に向けてわかりやすくまとめたこの書は、何もなかったところから「看護」という実体を立ち上げるための骨格に過ぎないのであって、彼女の真意はこれをもとに人々が新しいそれぞれの物語を作りだすところにあった。その際に気をつけるべき点は、彼女が「看護の知識は医学の知識とはまったく異なっている（...the knowledge of nursing...is distinct from medical knowledge...）」と述べていることである。看護師は、医師の領域にある「知識」や「技術」や「論文のスタイル」や「研究方法」をかならずしも真似る必要はない、というよりも、それよりも広くて深い視点から患者を診ることをナイチンゲールは考えていることがわかる。

2. 「知の発展の最前線」を成立させるもの

現場で働く看護師は「知の発展の最前線」（the forefront of knowledge development）にいる、とベナーは述べた（Benner, 1989）。「人間とは何か」をテーマに取り組んできたさまざまな学問の成果は、看護という分野を中心に実感をもって受けとめられる可能性を有している。「人間とは何か」を長い期間をかけて探求してきた、おもに哲学や文学、文化人類学や芸術などの人文系の学問は、看護学においてある総合的な地平に到達することができるとベナーは捉えたのである。机上の論理だけではなく、人が生まれ

てから死ぬまでの過程を扱い、さらには、生身の患者と言葉を交わし、接触による交流を介して、看護師は感覚的な領域をも含みながら実践を行い、思考を巡らす。

ベナーは『ケアでもっとも大切なこと（邦題：現象学的人間論と看護）』の最後に結論のように「看護教育はこれまであまりにも合理的・技術的なモデルに囚われすぎてきた」（Benner, 1989：筆者訳）と書いている。また、臨床の現場で実際に生じる予想不可能な多様性と、合理的・技術的なモデルに囚われた看護教育や看護研究などのあいだには大きな径庭があると彼女は述べている。その溝が埋まらないもっとも大きな理由は、近代的な合理性や普遍的な技術への過度な期待にある。つまり、身体を物理的に捉えることで最大の効果を上げようとしてきた医師の目的地と、看護師が目指すべき終着点は同じではないことへの認識の欠如をベナーは問題視しているのである。身体を動かないものとしてひとまず静態的に見ることから得られる利益と、一秒ごとに移り変わってゆく動きそのものを包括する実践の違いである。

実践は観念的で理論的な命題の不完全な名残のようなものとして見られてはならない。そうではなくて、実践はそれ自体で首尾一貫したものとして理解され、いかなる形式的な理論命題によっても捉えられないほどに複雑なものである。現場の看護師は「知の発展の最前線」にいたのであり、看護教育は看護師が実践との対話へと関わるように準備していく必要がある（Benner, 1989：筆者訳）

複雑な人間を単純化し、そこからこぼれ落ちた要素には目を向けず、整合性に執着し、それを強化する手続きの厳密性に固執するような態度は、思考の方向性が逆だということだ。複雑な人間をそのまま理解しようと努め、私たちが理解できないような要素はそのまま保持し、整合性などというものはある単純化された定義の応用でしかないと遠ざけることが肝要である。また、理論や数値や技術やモデルを現場に当てはめるのではなく、現実の世界自体に独自の秩序があることを想定する必要がある。そういうものが存在すると認

識することがまず重要である。そのような思考のアプローチこそ「知の発展の最前線」の場所なのであり、それなくしては、看護があらゆる学問を牽引する可能性を秘めている、とは言えなくなる。教育分野においてしばしば行われる「定義」や「理論」からの導入は、人間を「理解」可能なものへと細分化してしまう。それでは、人が生まれ、成長し、死んでいく総体的な人生のなかでの精妙な「気づかい（caring）」（Benner, 1989）は失われてしまうだろう。

たとえば、戦時下において、看護師養成の低年齢化と速成養成は喫緊の課題であり、そこで働く看護師にとって指示や命令で効率的に動くことはもっとも望まれることであった。戦争という特殊な状況を越えてなお、これまで続いてきた主流の看護観について、看護師の中西睦子は次のように述べている。

医学的人間観といえるほどははっきりした輪郭をもつものではなく、むしろ、命令や指示への忠実な対応をもって是とする、したがって速やかな刺激－反応型の活動こそ看護の真髄だと（無意識に）とらえている（中西, 1983）。

従来、臨床の現場において、効率性を求める組織のなかの有能な一員であることが看護師には求められる場合が多く、「看護とは何か」のような根源的な問いはさして必要とされなかった。そのような要請にしたがって、医師による命令系統を効率的に進めるために看護教育はプログラムされてきたという一面がある。ナイチンゲール自身もクリミア半島におけるスクタリの経験をもとに「看護」を体系化しようとしたために、緊急性の高い従軍看護師の属性を当初の看護のイメージはもっている。『看護覚え書』も同様のイメージのなかできわめてシンプルにあたかもマニュアルのように書かれた。戦場においては、どの患者にも当てはまる客観的な「モデル」を想定したうえでの迅速な対応は不可欠だからである。しかし、前近代と近代、戦時と平時のあいだで揺れるナイチンゲールの思考は多くの著作で認めることができ、『看護覚え書』と同時期に書かれた思索的結晶の一つである『思索のための提言（邦題：真理の探究）』はナイチンゲールの宗

教的かつ前近代的な側面が吐露されている。「いかにしてスピリチュアリズムを蘇らせ、ふたたび火をつけて生命のなかに取り込むかが、重要な問題である：筆者訳」（Nightingale, 1860/1994）と述べる視点から『看護覚え書』はもう一度、読まれるべきであろう。

他方で、平時における看護においては、緊急性の度合いは低くなる。それに代わって、日常性の奥に潜む人間に対する深遠な存在様態への関心（気づき）が求められる。ベナーは「看護師は、病状による経験と、患者がそのような経験に持ち込む意味を両方理解できるという特異な立場にいる」（Benner, 1989：筆者訳）と述べ、個々の患者の病状や背景が異なるように、一人一人が病気に対して投影する「意味」も多様であることを指摘している。医療が近代医学へと移行する過程のなかでこぼれ落ちたものを救い出そうとするときに、画一的な「モデル」とは異なる「患者が病気という体験に持ち込む意味」は否応なくつきまとう。近代的な視座に便利な「モデル」から離れて、意味を感受する精神を養おうとするナイチンゲール看護の原点に立ち返ることが求められているのではないだろうか。それこそが、看護師を職種や分野を越えた統合者の立場に立たせるきっかけになるであろう。

3. 身体論と芸術論からのアプローチ

ナイチンゲールやベナー、中西らと同じように、精神看護学を専門とする阿保順子もまた「看護の詩学」を意識化し、「身体」という側面から探求し続けている研究者の一人である。身体が発する言葉以前の情報を表現することの意義に着目し、膨大な情報を内蔵する身体の精妙な仕組みを解明しようとしてきた。語り得ぬものは語れないとしても、その存在を意識して表現することの意義を看護学の側面から強調したのである。回収できぬものを回収しているように見せかけながらあるパターンの中に落とし込むことの弊害について、阿保もまた従来の看護教育の欠点として次のように述べている。

誰が誰に対して行っても同じように繰り返される行為として抽象化して語れるものではない。看護実践と

は、技術を、その人の身体をとおして患者の身体にはたらきかける技として適用することである（阿保, 2015）

共有するためにわかりやすく薄められ、それだからこそ強力な「身体像」を基盤にした看護実践は、単なる反復行為へと変容し、中西が述べた「命令系統」を重視した時代の看護師像をかたくなに守り続けることになる。「教科書の方法では理解できない」あるいは「理解するためには他の方法がある」とあらかじめ想定することが重要なのであって、すべてのことを「知りうる」とする近代的思考の態度自体に問題が隠されている。中西による「問題が主体（看護師のこと：筆者註）に認知されるということは、その主体が解決に対してすでに動機づけられた状態になっていることを意味する」（中西, 1983）という指摘はとりわけ重要である。効率的に動くためにはすでに限られたわかりやすい答えを用意しておかなければならないが、実際には、その場その場の判断が求められる。その場での判断を効率的に下すための身体を涵養するには、言葉になる以前の状態で潜む感情を重視する「看護の詩学」という発想は避けては通れない。例えば、阿保が掲げる「オノマトペ的身体」という表現は、言葉に昇華される手前の感覚を述べようとする試みの一つである。これは、科学的な証明によって明らかにできなくても、感覚として了解できるレベルの身体であり、擬態語（オノマトペ）でしか表せない身体の感情表現から情報を得ようとする特別な感性を指している。それはもはや医学や生理学の分野では分析され得ないものである。

生理学や医学の否定ではない。たとえその現象が生理学的に解明できたとしても、果たしてそれが目の前の患者にかかわる看護の根拠になるのだろうか、と言いたいのである。生理学的な根拠だけを看護の根拠にしたいのだろうか（阿保, 2015）

医学とは異なる身体へのアプローチを探ることによって、看護の独自性、引いては、機械にはとってかわることのない広大な領域への探求へとつながる。

岡田実もまた精神看護を専門とし「看護の詩学」に独自の方法で切り込む研究者の一人である。ナイチンゲールがスクタリから帰還した直後の「看護以前」に焦点を当てることによって「近代看護の創始者」という固定した評価に異を唱える。そのアプローチの一つは「文学」からの視点である。オスマン・トルコ側についたイギリスから見ると敵国にあたるロシア側から、レフ・トルストイはクリミア戦争を描いた。この「セワストーポリ」という作品に岡田は着目する。小説は作者という特定の視点から語られながらも、意匠を凝らすことによって時代と土地を映す鏡となり、人々に感情を移入させる。現実には、見る人は出来事の一部を取り出すことしかできず、しかも、表現方法は多様でバイアスがかかるから、ある出来事を誰もが納得できるような客観的な表現で提示することは不可能である。このような原理は、人物（患者）を表現する際にも当てはまることは容易に想像できる。つまり、戦争や出来事、あるいは人物は「客観的な数値や説明」という鏡では何も映すことはできない。教科書的な客観表現でも特定の個人の日記でも到達できない領域に小説家は分け入ってゆく。小説家の感性によって生み出された表現とそれを共有する読者がそのたびごとに出来事を書き換えるのである。

そのような感性を携えた岡田（1986）は、ナイチンゲールを通して見た看護のもつ深遠なレゾン・デートル（存在価値）を、当時最新の機器であったカメラという「複製技術」（ベンヤミン、1931/1998）を媒介にして論じている。ナイチンゲールの内面を抽象的な理論ではなく、芸術的な感性によって探ろうとする点において、彼が採用した手法はきわめて革新的なアプローチであると私には思われる。岡田がそれを選択した理由は、看護に対する硬直した視線をそのままナイチンゲールに投影することを極力避け、ナイチンゲールが生きた「同時代性」に身を浸しながら、彼女の入り組んだ真意とそこから導き出される看護の本質を見出すことにある。当時、クリミア戦争からいくつかの土地を経由して、さらには偽名を使ってまでしてイギリスへと戻ったあとに、寝室を書斎として遁世した（とされる）ナイチンゲールの内面から「看護とは何か」を探ろうとするのである。これまで、彼女

の陥った病気や錯綜した心境を解き明かそうとする試みは、さまざまな論者によって何度もなされてきた。しかし、それらとは一線を画したアプローチを岡田は採用し、帰還後に撮られたひととき特徴的なナイチンゲールの肖像写真に着目する。奇しくもナイチンゲールの生年と没年が同じフランスの写真家ナダールによって「肖像写真」は世間に広められた。この新しい「アート」は、一人一人の個別性を際立たせる役割を果たし、人々がいままで気づかなかった感性の領域を開拓したのである。写真（美術）評論家の多木（2007）は、次のように述べている。

人間がその「顔」によって、当の人物が意識しているとはかぎらない彼らの存在の意味、内面とばかりはかぎらないさまざまな意味を外面化し、あるいは見られる顔に自らを同化しているのに気づいたのである。絵画や彫刻における肖像の歴史は古いが、「顔」の表情が意識化されるのはさほど古いことではない（多木、2007）。

同じことを少し簡略化して多木は次のようにも述べている。「どの顔も何かを物語っている。写真家にできることは、内面を推測することではなく、その顔の物語を見ることである。その顔の物語るものは、かならずしもその人の内面ではない」（多木、2007）。非科学的な呪術を徐々に駆逐してきた科学は、写真という技術を通して新しい呪術をそこに発見した。このような当時最先端の機器であるカメラを通した近代的風景の中に前近代の呪術を見るような感性をもって、岡田はたった一枚のナイチンゲールの肖像写真からストーリーを紡ぎ出す。

髪を短く剪ったナイチンゲールの異様な写真に籠められた想いは、彼女の脳裏に焼き付いたこれらの惨状だけでは説明がつかない。抽象的に「人間の生命」「人間の尊厳」と形容したのでは、ナイチンゲールが看取った具体的な生命個々の、彼女にとっての意味が失われはしまいか。人は一般的な生命と出会い、そして別れるのではない。それらが常に具体的、個別的であるからこそ口惜しく、辛く、愛しいのだろう。彼女

の会った生命や死とて同様である。彼女にとってこの戦争が凄惨であったのは、戦争の光景だけにあったのではない。彼女が人格的に関わり続けた一兵卒らの生命、即ち生き様個々の具体性が、戦争の中で無視あるいは軽視され、自身の部署の只中で次々に失われていったことにある（岡田、1986）。

図らずも、岡田の試みた大胆な手法は、フランクフルト学派のベンヤミン（1931/1998）が『写真小史』で説いた方法によく似ている。前近代と近代のはざまを生きたナイチンゲールの一枚の写真は、もはや呪術的な謎めいたところは少しもないが、近代的な機器を通して、解読されようと待ち構えていた細部が浮き彫りにされる。それはまるで魔術のように時空間を越える通路や物語となる。ベンヤミンは次のように書いている。

写真を眺める者はそこに、現実がこの写真の映像としての性格にいわば焦げ穴を空けるのに利用したほんのひとかけらの偶然を、＜いま－ここ＞的なものを、どうしても探さずにはいられない。画面の目立たない箇所には、やがて来ることになるものが、とうに過ぎ去ってしまったあの撮影のときの一分間のありようのなかに、今日でもなお、まことに雄弁に宿っている（ベンヤミン、1931/1998）。

近代科学は私たちの前から伝統によって培われた精妙なる現実を覆い隠した。あらゆるモノが「モノ語る」という事実を忘却させた。ものごとを単純化させ人間を含めたすべてを抽象的な言葉や数値に置き換えて「理解可能」なものへと置き換えた。しかし、ベンヤミンによれば、カメラは私たちに新たな物語を与えた。人は誰もが一回性を生きているというあたりまえの事実を一瞬の閃きの中に暴き出す岡田の真意は、最後、次のような言葉に収斂される。

言語化されたものだけが、個人の思想を決めるのではない。また、言語化されなければ思想ではないということも勿論ない。言語下に深くかつ重く潜ませた「思想的な態度」こそ、思想性において高い信頼を、

そして、思想の本質においてはその深さを保障し得ることがある。無言の一枚の写真が、この「思想的な態度」を象徴的に表現したものであったとはいえないだろうか（岡田、1986）。

言葉に置き換えられる前の「閃き」を感じ取り、患者をそのようなまなざしで見ることのできる思想的態度の重要性を岡田は述べている。芸術を扱う学問の多くは、言語による普遍的・客観的なアプローチをかならずしも信じてはおらず、量的に測定不可能な感覚の領域を重視する。普遍的な解決方法は人間や自然や社会の「何か」をかならず取り逃がしてしまうからである。それらに置き換えられない複雑な「現実」の一部をなんとかして表現するために、人文系の学問が対象とする絵画や写真のような種々の芸術形態は生み出されたとさえ言えるだろう。日常の言葉にはならないものを詩のような修辭的な方法を使ってなんとか表現しようとし、あるいは、絵画や音楽や彫刻などの言語以外の媒体へと表現方法を求めて「人間とは何か」を探索したのである。看護師が目指すべき専門家としてのアイデンティティもまた、そのようなものであると岡田は考えていることが推察できる。これら人文系の学問の手法は「知の発展の最前線」にある看護および看護師の力を借りることによってさらなる高みを目指すことができるに違いない。

おわりに

『看護覚え書』の「はしがき」に続く文章は「一般原則」（general principle）の説明から始まる（Nightingale, 1860/2017）。そこで「病気は、賠償過程（reparative process）である」というナイチンゲール看護学の根本の思想が明らかにされる。一般には「修復過程」と訳されるこの言葉であるが、語義的にはまず「賠償の」という意味が最初に来る。また、そう訳した方が論旨にふさわしい。不摂生などによって損なった健康は自然への借りなのであり、それを返済する過程が病気のあらゆるフェイズなのである。秩序を乱した状態である病気は大いなる秩序である自然に負債を返していく、というイメージでナイチンゲールは捉えている。彼女にとって、自然とともに

神という調和があり、それを乱した結果として病気は現れるものであった。さらに、ここで気をつけるべきことは「nature」を「自然」と訳している私たちの理解である。国内においてももっとも早く、大正二年（1913年）に“Notes on Nursing”を『看護の葉』と題して邦訳した日本赤十字社篤志看護婦人会講師である岩井（1913/2014）は、それを「造物主（かみさま：ルビ）」と日本語に置き換えている。『思索のための提言』を読めば、このnatureがGodの意味に近く、したがって、岩井の訳は適切であることがわかる。わが国において、natureをどのように解釈しどのように日本語に置き換えてきたかの歴史は、柳父（1995）の『翻訳の思想—「自然」とNATURE』に詳しい。霊性を備えた「自然」と人間とのあいだの関係のなかで病とその治癒を語ろうとするナイチンゲールの真意を探ろうとするならば、ホリスティックなどの新しい言葉を持ち出す必要はないかもしれない。ナイチンゲールの『看護覚え書』に書かれている「ヒント」から熟考し、それ以外の彼女の著作を紐解くことを通して、「看護の詩」を解することが可能となる。そして「看護の詩」とは、私たちの生きる現代においても参考となり、看護師の専門家としてのアイデンティティへの示唆を与える。『看護覚え書』の「補章」の冒頭「看護師とは何か」のなかでナイチンゲールが述べる看護師像とは、このような点からも意義深いものではないかと私は考えている。看護師は、看護を中心におきながらも、宗教・科学・芸術のあいだでナイチンゲールが苦闘した過程から導き出される、古くて新しい看護師像に目を向けることによって豊穡な学びを得られるだろう。

文 献

阿保順子(2015). 身体へのまなざし—ほんとうの看護学のために. すびか書房, 埼玉.

Benner P., Wrubel J. (1989). The Primacy of Caring: Stress and Coping in Health and Illness. Addison Wesley, Menlo Park.

ベンヤミン ヴァルター(1931/1998). 久保哲司, 写真小史. 筑摩書房, 東京.

岩井禎三(2014). 看護の葉. 坪井良子, 近代日本看護名著集成 第10巻(再版), 大空社, 1-296, 東京.

中西睦子(1983). 臨床教育論—体験からことばへ. ゆみる出版, 東京.

ナイチンゲール フローレンス (1860/2005). 小林章夫訳, 真理の探究—抜粋と注解. うぶすな書院, 東京.

Nightingale Florence (1860/1994). Suggestions for Thought by Florence Nightingale: Selections and Commentaries . Edited by Michael D. Calabria and Janet A. Macrae. U of Pennsylvania P, Philadelphia.

Nightingale Florence (1860/2017). Notes on Nursing: What It Is, and What It Is Not. Digireads.com Publishing, Overland Park.

岡田実(1986). ナイチンゲールの「無名性」の思想. 総合看護. 21(1), 17-42.

Risjord Mark (2009). Nursing Knowledge: Science, Practice, and Philosophy(first edition). Wiley-Blackwell, West Sussex.

ロルフ ゲーリー (1996/2017). 看護実践行為—理論と実践を統合する, 塚本明子, 看護実践のアポリア—D・ショーン《省察的实践論》の挑戦(初版). ゆみる出版, 東京.

多木浩二(2007). 肖像写真—時代のまなざし. 岩波書店, 東京.

柳父章(1995). 翻訳の思想—「自然」とNATURE. 筑摩書房, 東京.

Some thoughts Concerning “the Poetry of Nursing” (Nightingale) : “the Forefront of Knowledge Development” and Nurses’ Identity

Toshiyoshi IMURA¹⁾

¹⁾Nagano College of Nursing

【Abstract】 Nurses not only collaborate with medical staff but also play an independent role as professional persons, which includes how they should think about nursing among other professions and academic disciplines as well as technological aspects of individual nurses. But the role of nursing is constantly fluctuating together with the changing times. Furthermore, there is a difference between the role of Japanese nursing and that of other countries.

Considering these conditions, we discussed the whole concept of future nursing in Japan. First, I started with the phrase “the poetry of nursing” by Florence Nightingale, after that, “the forefront of knowledge development” by Patricia Benner. Second, I complemented their ideas with an exploration of two Japanese nurses. One is Junko Abo, who used body theory and the other is Minoru Okada, who delivered his remarks through artistic theory such as the theory of literature and photography.

As all patients are different, what is more, constantly changing in many respects, therefore, when nurses honestly engage with others as medical service workers, they should not have fixed models but the attitude of trying to know how complex humans are.

Based on the above, this essay is intended to address some issues concerning the identity which nurses should refer to as specialists in order to engage in multi inter-professional collaboration. As a result, it is hoped that the role of nurses Nightingale presented based her thinking on religion and art will contribute to a better understanding of the whole concept of future nursing in Japan.

【Keywords】 (pre)modern, the poetry of nursing, the forefront of knowledge development, body theory, artistic theory

井村俊義
〒399-4117
長野県駒ヶ根市赤穂1694番地
長野県看護大学
Tel: 0265-81-5139 Fax: 0265-81-5139
E-mail: imura@nagano-nurs.ac.jp
Toshiyoshi IMURA
Nagano Prefecture
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, Nagano, 399-4117 JAPAN
TEL: +81-265-81-5139 FAX: +81-265-81-5139
E-mail: imura@nagano-nurs.ac.jp